

森鷗外の翻訳作品(二) :
「戦僧」 「新世界の浦島」 をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1991-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松木, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1503

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



森鷗外の翻訳作品(二)

——「戦僧」「新世界の浦島」をめぐって——

松 木 博

序

森鷗外の作品に見られる本文の異同については、既にいくつかの研究がなされている。創作の場合は、加筆或いは削除の様態について多くの言及があるのだが、翻訳作品の異同に向けられた発言は意外に少ないようである。^①

おそらくその背景には、翻訳作品に文学的なモチーフを発見出来ないとする考え方があろうのだから。けれども、同時代の読者にとって鷗外の翻訳作品は、創作とそれほど懸隔をもって読まれていたのだろうか。

『新小説』中鷗外の『そめちがへ』はおれでも斯んな事は書けるよと一寸多芸の工合を示したるものなるべし、されど『埋木』流にあらねば作者の柄に合はぬなり、(下略)^②

これは創作「そめちがへ」についての同時代評の一つであるが、この文章に見られるように、当時創作「そめちがへ」と翻訳(「埋木」)を区別する意識はそれほど強くなかったと考えることが出来る筈である。言いかえれば、私達は創作と翻訳とをあまりに明確に弁別することによって、同時代の人々が持っていた豊かな読み方を放棄してしまったのかも知れないのだ。^③

本論で私が参考にしたと考えているのは、明治二十二年に名古屋英和学校の学生であった、吉川潤二郎という名の少年の「視点」である。とは言っても吉川少年について、私はほとんど知識を持っていない。知っているのはただ、明治二十二年の雑誌「少年園」に彼が「少年園ヲ読ム」という文章を寄稿し掲載されていることと、その文中に次の様な一文が見られることである。

東海散士ハ吾人ノ為ニ良友ヲ選ビ、愛郷学人ハ吾人ノ進路ヲ導キ、博愛堂主人ハ火山ノ理ヲ教ヘ、鷗外漁史ハ絶妙ノ奇話ヲ説ク、其他功名富貴ノ原野ハ吾人ノ心底ニ徹シ、グレイレー氏ノ伝ハ吾人ノ志氣ヲ養フ。(傍線引用者)

この文を理解するために、背景について若干記しておきたい。同年十一月に「少年園」は創刊一周年を迎えていた。吉川少年の文章は一周年を記念して募集された読者の作文の優秀作である。引用した文は、一年間の雑誌の記事の中で彼の印象に鮮やかな執筆者の名を列挙したものとと思われる。

当時のどのような執筆者が、吉川少年の心をひきつけたのだろう。そうした興味を持って眺めてみると、意外なことに気がつく。そこに挙げられた名前は、自然科学系の文章を書いている博愛堂主人を例外として、現在も私達になじみ深い作家達のものなのだ。

東海散士すなわち柴四朗は、明治十八年から年に一篇ずつ刊行していた長篇「佳人之奇遇」によって既に多くの読者を獲得していた。その散士は「少年園」創刊号に「朋友ノ感化」と題して友人について論じる一方、十三号から南北戦争当時のアメリカに於ける言論人の立志伝「虞令礼氏ノ伝」を連載していた。グレイレー氏とは、現在の共和党の創始者である Horace Grealey (1811～1872) のことである。不遇の少年時代を過ごしながら、ジャーナリストとなり有力な政治家へと成長した人物で、少年達の目標とするにふさわしい存在と言えらるだろう。

また愛郷学人とは、ほぼ一年後に小説「帰省」を発表することになる宮崎湖処子の別号であり、彼は十二号から「壮士、青年、少年」と題した評論を載せている。その内容は青少年の進路を世を憂うる壮士、文学や家業に埋没してしま

文学(家業)青年、勉学する少年の三つに分類し、読者である少年達はその勤勉な態度を崩さず、学業を放擲することなく成長して欲しいというものだった。

ただ私がこの文の中で注目したのは、言うまでもなく鷗外についての記述である。ここで改めて、吉川少年の「鷗外漁史ハ絶妙ノ奇話ヲ説ク」という一句を反芻してみたいと思う。「奇話」という熟語は、鷗外がロマンティズムを翻訳する際に用いた「伝奇」という語を想起させる。鷗外の文学活動の各時期に内在するロマンティズムについては、周知の通りである。私はこの吉川少年の言葉に、非常に結晶度の高い批評が含まれているという印象を持つのだ。

しかも忘れてはならないのは、吉川少年が明治二十二年十一月の時点でそのように書いていたことである。最初の創作として「舞姫」が発表されるのが二十三年一月、それに先駆けての評であったわけだ。つまり彼が確実に目にするのが出来たのは、同じ「少年園」に掲載されたアルフォンス・ドーデの翻訳「戦僧」(十号)とワシントン・アーヴィングの翻訳「新世界の浦島」(十三号より十八号および二十号)とであった。そして吉川少年はこの二作品に「絶妙ノ奇話」という形容を与えたのである。

私はここで、吉川少年が後の文学活動を予見していた、などと言うつもりはない。そうした物言いは甚だ危険であり、同時に結局何も産み出さないからだ。ただ、このように表現することは許されるだろう。明治二十二年の段階で吉川少年が垣間見た鷗外は決して幻影ではなかった。或る意味では、「舞姫」という様々な意味で問題を持った作品が発表されてからの読者には見え難くなってしまった、鷗外の文学活動の一面を直視していたのである。前に引用した「反省雑誌」の同時代評の筆者と同様に、とらわれていない視野を持っていたと考えていいのではないだろうか。

私が以下の章で試みるのは、こうした吉川少年の視点に限りなく近づくことである。そして冒頭に記したように、翻訳の異同の問題を考えてみたい。吉川少年が目にした「戦僧」と「新世界の浦島」には、作品集「水沫集」に収録される際①に小さな、しかし看過出来ない異同(削除)がある。この異同を軸に二作品をもう一度とらえ直してみたいのである。

鷗外についての、極めて早い評者であった吉川潤二郎少年はその後、どうなったのかわからない。愛知県は言うまでもなく、坪内逍遙（愛知英語学校を卒業）や二葉亭四迷（名古屋藩学校を中退）を生み出した土地である。吉川少年も当然そうした先輩たちを知っていたであろうし、文学少年であったことは投稿の文章にも明らかである。しかし、残念ながらその後の様々な記録の中に、吉川潤二郎の名を見ることはできない。また官吏として、あるいは学者としても大成した記録はない。しかしその視点は、鷗外にとつての明治二十二年、その文学活動の意味をより直接的にとらえる助けとなつてくれる筈である。

一

「戦僧」は、鷗外の翻訳作品の中でも殊更に短く、梗概を述べることも比較的容易な作品である。最初にその梗概を記しておきたい。

作品の舞台はスペイン。時代は正確に特定し難いが、歴史上「カルリスタ戦争」と呼ばれる十九世紀の内戦の最中と思われる。当時は王軍と共和国軍が激しく対立していた。或る日王軍の戦僧の前に共和国軍の兵士が捕虜となつて十三名連れ出される。戦僧とは、戦地で宗教的儀式を行なう僧でありながら、戦闘にも従事する人の呼び名である。丁度その日が宗教の祭日ということもあつて、戦僧は機嫌が良い。いつも残虐に扱ふ捕虜も「国王万才」と唱えさせただけで仲間に加えてしまおうとする。ところが、トニオという名の十七才の少年だけは降伏しない。折から共和国軍側の反撃によつて戦闘が始まり、戦僧は神の祝福を人々に伝えたばかりの手で少年を射殺する。

「少年園」の読者は、この作品をどう受容したのだろう。これはあくまで推測でしかないが、自らの信念に殉じた少年兵士の悲壮美に感動したと思われる。鷗外の訳文も、そうした印象を与えようとしたことは確かで、それは結びの一文で

トニオを「少年の義士」と形容していることから明らかだ。^⑥

またトニオの年令が、掲載された雑誌「少年園」の中心的な読者の年令である十七才であったことにも注目したい。一般に人間は自らの年令に敏感なものである。ふと目にした記事でも、自分と同年令の人間が扱われていると妙に印象に残る。自分ならどうするだろう、そうした感情移入が容易なのであろう。「少年園」の投稿欄である「芳園」には、十七才から十八才の少年の文章が多数採録されている。^⑦

そう考えるならば、「戦僧」が「少年園」に発表されたことは、必然のことだったと言ってもよいのではないだろうか。発表する媒体を、鷗外は十分に意識していたと思われる。こうした掲載誌への注目から、作品を読み解いていくことも可能と思われる。

さて、「戦僧」について私にはもう一箇所注目したい部分がある。それは、次に挙げるような異同である。

(初) 軍服のほの見ゆる——否、佩びたるカタロンニヤ刀の柄と短銃の把との、其間より露はるゝは、山陽外史が襟袂甲観といひし様にも似たらんかし。

(改) 軍服ほの見え、佩びたるカタルニヤ刀の柄と短銃の把と其間より露れたり。

これは後に作品集である「水沫集」に収録される際に、一部分削除されているわけである。一般的な考え方からすれば、初出は未定稿であり、改稿したものが定稿すなわち本文ということになる。なるほど削られた部分はなくとも作品の読解には何の支障もなく、むしろ引き締まって見える。そうしたこともあってか、この異同に言及した論は見られない。

しかし、これまで見てきた「少年園」という媒体を考え合わせると、新たな解釈が可能になるように思う。則ち、初出形には少年読者の知的好奇心を刺激するメッセージが込められていたのではなからうか。

さて、問題の箇所は頼山陽の「日本外史」巻之一にある。鹿ヶ谷での密議が露見し、平清盛は激怒して武装して後白河法皇等に迫る。注進によって重盛が説得に訪れ、「欲忠則不孝、欲孝則不忠」（忠ならんと欲すれば則ち孝ならず、孝ならんと欲すれば則ち忠ならず。）という句に続けて、陰謀を企てた人達を殺すならまず自分を殺してからにせよと述べて、清盛の怒りを鎮めてゆく。その際に清盛は重盛の前に出るので、黒衣を鎧の上から着て戦う意志を隠そうとする。しかし襟が狭いので、いくら隠そうとしても鎧が見えてしまうのだ。「表黒衣而出。数正襟。襟呿甲観。」（黒衣を表して出て、しばしば襟を正す。襟呿き甲観ゆ。）平清盛の人間像が凝縮された一句と言えるのではないだろうか。

「戦僧」に登場する戦僧の人格を形容するにも、まことにふさわしい表現というべきだろう。確かに戦僧の苛酷さは、清盛にも通ずるものがある。「襟呿甲観」はその意味で、「戦僧」という作品を瞬時に理解させるキーワードなのだ。

「日本外史」は頼山陽が二十代でまとめあげたとされる作品である。そして幕末から明治大正と、多くの読者に支持されてきた。その読者の年齢構成は一体どのようなようになっていたのだろうか。現在からそれを推測することはやや困難である。ただ、出版の形態から、おぼろげながら読者像が見えて来るように思われる。今回調査した中で刊記が最も古いのは、朝野書店発行の「訳文日本外史」（訳者上田景二）の明治四十五年三月である。この書は題名から明らかなように、原文を訓訳し重要な部分のみ返り点等を付した原文を並載したものである。漢文を読みこなす力が衰えつつあったことがわかるが、その凡例には「目下教育上の懸案たる学生をして漢学の素養を助けしむる」とことと「学校其他文武士吏の登用応試者に便益を与へるために刊行した」と述べられていた。青少年、しかも試験を控えた学生達こそが、「日本外史」の読者だったのである。鷗外が少年期に、この「日本外史」を一度も読まなかったとは考え難い。その鷗外がかつての自らに宛てるように、明治二十年代の少年達に向けて挑発的なメッセージを送っていたのではないか。この一句だけで、「日本外史」の該当部分を想起し、洋の東西の類似に興を感ずることが出来れば、及第ということになるだろう。それが出来た時の少年の誇らしき、わかったという快感を予想してこの一句が置かれていたとするのは、過ぎた想像であろうか。

「新世界の浦島」については、翻訳作品としての質を考察した、亀井俊介氏の優れた先行研究が既にある^①。また一方で、小倉齊氏が指摘するように、後年の浦島説話への関心にも接続させて考えることも必要であると思われる^②。

けれども、この作品が「少年園」の読者にどのように見えていたかを考える時、この作品を読み解く新たな視点を提供することが出来るように思う。ここでも、吉川少年の視点を追体験することからはじめてみたい。

それというのも、「新世界の浦島」が掲載されはじめる一カ月前、号数にして二号前の十一号（明治二十二年四月三日）に「URA SHIMA : A JAPANESE RIP VAN WINKLE」という英文が載せられているのだ。内容は、ごく一般的な浦島の物語だが、この英文に付されている「少年園」記者の識語が興味深いので、煩をいとわずここに引いておきたい。

此英文は、Urashima : A Japanese Rip Van Winkle と題し、我邦人 Masayuki Kataoka 氏の筆に成りしものにて、浦島太郎の昔話しを記したるものなり。（中略）我少年園を飾れる少年諸子には、趣味殊に多かるべしと覚ゆるを以て、ここに採録することとせり。（中略）題に A Japanese Rip Van Winkle とあるは、西洋の名高き昔話しに、Rip Van Winkle といふ者、或時霊山に登りて仙人に遇ひ、一杯の仙酒を飲みて陶然醉況し、一夜を其山中に明かし、翌朝我村へと帰り来りしに、何ぞ凶らん、其村は大に景況を變じ、一村皆知らぬ人のみにて、親戚故旧は皆既に墓場の土と化し居れり、蓋し Rip Van Winkle は二十年の長の歲月を山中に華胥の夢の枕に過せるなりき、という物語あり。事甚だ浦島太郎の物語に類似すれば、かくは題せしものなり。いづれ Rip Van Winkle の詳しき物語は、他日本誌に載することあるべし。（傍線引用者）

この識語から、少なくとも三つのことが明らかに言えるだろう。第一は、題名が鷗外のオリジナルなものではなかった、

ということである。無論オリジナルとしても誰もが考えつくような種類のもので影響があるわけではないが、これほど密接な呼応関係が存在したことは注目されてよいと思われる。

第二に、傍線部から、少なくとも十一号の時点で「新世界の浦島」は掲載が予定されていたことがわかる。突然持ち込まれた原稿ではなく、むしろ依頼されて翻訳した可能性が強い。「少年園」記者（おそらく発行者山縣悌三郎）との関係も浅くはないことがうかがえる。

第三に、鵜外としては、読者が既にこの作品の梗概を知っていることを承知で「新世界の浦島」を発表したと考えられることである。英文の「Urasima」と「新世界の浦島」の掲載時期の近接は、むしろ意図的なものではなかったか。

英文に付された識語から、私はやや性急に関係を論じてしまったかも知れない。けれども、別稿で述べたように「少年園」という雑誌には、読者に如何にして明確な印象を与え知識を植え付けて行くかという「技術」が鮮明にされているのである。その意味では、雑誌の編集意識がこれほどはつきりとしている雑誌も当時は珍しかったと言えるだろう。

こうした背景を考慮するならば、私達も吉川少年と同様に英文の浦島譚と「新世界の浦島」とを比較検討しつつ読み進めなければならぬだろう。この二作品は、そうした読みを当時の読者に要請しており、共に翻訳でありながら文化の差異を顕在化することが可能だった。たとえば、英文の浦島が最後に発した言葉は“Beware of curiosity.”であり、主人公は好奇心への断罪・禁忌を犯したことへの処罰という否定的結末を迎えるのに対し、「新世界の浦島」では生活に疲れた人間はリップに憧れる、というように、一度ドロップアウトした主人公が肯定的な形で社会に復帰することを許され、物語は終わる。浦島譚としてこの二作品を読み始めた読者は、その結末によって「新世界」の実質（自由）を強く印象づけられることになるのである。

ところで、この作品にも、以下に挙げたような後に削除された記述がある。いずれもが注釈的なのだが、それらについて考えてみたい。

a 尖柱戯といふのは尖柱なりの木をいくつも立てゝ置いて、木の丸を転かして遣つて打ち倒し、その倒れやうと倒れた木の種類とで勝負を決する戯です。此一段は玉手箱よりは寧ろ爛柯の故事に似て居ますが、後の方を読んで見ればまた浦島に近い所もありませう。

b バンカースヒルといふ岡は、ボストンとカムブリッジの西北に當つて、チャールスタウン半島の上にあります。此処は千七百七十五年六月十七日に米人が英兵と戦つて敗れはしたが、英人と雇独逸兵とに充分に抵抗した所です。今は二百二十一尺の高さの記念碑が立つて居ます。

c 千七百七十六年米合衆國の獨立した年です。

d 「アントニス、ノオス」アントニス、ノース即ちアントニーが鼻はホトソンから東に當つて航海者の目標になる岬の名です。ストニー、ポイントの砦はこの西にあつて千七百七十九年ウエーヌ將軍に攻られました。

e 「額を指さしました。」歐洲一般にも通ずるなり振で、若し狂人ではないかといふ意を示すのです。

f 「舌を頬へ推込んだ人もあります。」亞米利加人と英吉利人だけに弁る振で、少し馬鹿にして信用せぬ所を示すのです。

g アルヴィングはこの小説を書いた時にはホドソンの地は丸で知らず、千八百三十二年に始めて、ケーツキルの麓へ来てリツプの旧跡を尋ねました、渠が見たこともない山水の景を緻密に描出した筆力は、丁度独乙人シルレルがまだ瑞西へ往つたこともなくつてヴィルヘルム、テルの伝奇を作つたと一對の佳話だとゲーデルツは云ひました。

既に亀井俊介氏が指摘するように、これらの注釈文はレクラム文庫版の訳者ゲーデルツの語注をそのまま拝借したものである。しかし、原作にも独語訳にもある序文や後注を省略しながら、これらの注釈文のみ残しているのは奇異な感じがする。

だが、掲載された「少年園」の編集方針からすれば、それも容易に理解することができる。これらの注はいずれも、ア

メリカの歴史や地理そして風俗習慣に関わるものであり、「少年園」はそうした知識を読者に与えようとしていたのだ。

また、aの「爛柯」の語は、丁度前章で論じた「襟呔甲観」に通ずるものがある。「爛柯」とは「述異記」に見える伝説事で、晋代に山の中で童子が碁で遊ぶのを見物していた青年が、ふと我に帰ると、さっき傍に置いたと思った斧の柄が腐爛し（爛柯、柯とは柄のこと）、里に戻ると同世代の間人は誰もいなくなっていた、という話である。この作品に於いても「爛柯」の一語で鷗外の意図するところを理解し得た少年は快哉を叫び、優越感を味わったことだろう。たとえそれが、一般常識からわずか一步上の知識（だからこそ「水沫集」に於いて削られたとも考えられる。）だったとしても、知的好奇心を伸ばして行く契機にはなり得るのだ。吉川少年の評価も、そうした知的興奮を与えてくれたことによると考えてよいだろう。比較文化の視点は既に彼の手中にあったと思われる。

結

子供の頃、一面に点が打たれた紙を与えられたことがある。よく見るとその点一つ一つに番号がついていて、その番号順に鉛筆を走らせてゆくと思いがけない図柄が現れてくるのだった。この、点と線という比喩で表現するなら、「戦僧」と「新世界の浦島」を点としてとらえていたのでは見えてこないものがある。雑誌「少年園」を媒介として線で結んで見ると、発表当時の翻訳紹介の意図の一面が、極めて明瞭に浮上してくるように思われる。言葉を変えていうなら、初出の形態こそ、鷗外が後に続く世代へ差し出した手であった筈である。

ここまで見てきたように、「少年園」という雑誌の読者の視点から、鷗外の二つの翻訳をとらえてみると、現在の全集によって何うことの出来ない視野の広がりがある。作家が作品を発表するとき、その作品を限定された想定した読者に届ける、そうした発想があるのではないだろうか。その経緯を活字化された作品は洗い流し、読者に伝わることは、極めて希である。しかし、その作家の密やかな発想を探り出すことも時には可能であり、それが発見出来た時、作品の読みはさ

らに深まるのではないだろうか。

ところで、冒頭で引用した吉川少年は、鷗外の態度を「絶妙ノ奇話」を「説ク」と形容していた。二つの作品を初出の形態で読む時、吉川少年が言うとおり、二つの作品は少年読者にとって絶妙と表現したいほど感興を与えていた筈であり、鷗外は「語」っていたのではなく、まさに少年達へ熱っぽく「説」いていたのだということがあきらかになる。

註

- ① 創作については、例えば嘉部嘉隆氏の「森鷗外『舞姫』諸本研究と校本」(桜楓社)に見られるように精緻な分析がなされはじめているが、翻訳については、まだ研究の対象とされているとは言いがたい。
- ② 明治三十年「反省雑誌」無署名。
- ③ 近年、例えば吉行淳之介や、村上春樹、常盤新平、あるいは沢木耕太郎のような文学者の翻訳が、従来の「透明な」翻訳者の位置付けを変化させつつあるようである。翻訳者によってその作品を選ぶ、という関わり方が意識化されようとしている。
- ④ 異同という言葉はこの論の場合、単なる誤字や脱字の補訂にとどまらない、コンテキストの変更を伴うものと考えたい。そうしたものであってはじめて、考察の対象になり得ると考えるからである。
- ⑤ 鷗外は一年後の「舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書」で「戦僧」ではトニオが主人公だと述べている。
- ⑥ 読者の年齢については、この雑誌が出している懸賞の年齢制限からも推測可能である。「尋常中学及び之に相当する各種学校の生徒に限る」という第一の課題の設定は、そのまま中心となる読者層を示していると考えられよう。
- ⑦ 『「新浦島」を読む』(「比較文学研究」一九五七年十二月)
- ⑧ 『「玉篋両浦嶋」について』一九八九年十二月、鷗外研究会に於ける口頭発表。
- ⑨ 第十五号の目次から「片岡正行」と表記することがわかるが、詳細は不明。尚、十五号から三十号にかけて、もう一つの神仙譚である「和狂兵衛」を断続的に連載している。
- ⑩ 拙稿「雑誌『少年園』と森鷗外」(「大妻女子大学紀要・文系第二十三号」平成三年三月二十日発行)の第二章参照。